

求められる指導者の“言語表現力”

スポーツ医・科学的トレーニング専門委員会委員長

富山大学 教授 山地 啓 司

最近アカウンタビリティ（説明義務）、FD（ファカルティ・ディベララップメント：教授法）、ディベート（討論術）等の、いかに巧みに自己の意思を相手に伝えるか、説明や広報するか等、の能力が教師なり指導者に求められるようになってきた。

かつて、わが国では言語を駆使して指導者の知識なり意志を選手や生徒に伝えるより、むしろ選手なり生徒の方が師の思いを感知し、婉曲的な言葉から真意を読み取ることが求められてきた。特に日本古来の徒弟制度では、師の家に住み込み、生活を共にしながら、師の生活態度、トレーニング法、技術や知識を学び取り、時にはその奥義を盗みながら自らを磨き高めて、師に追いついたことが認められて始めて、師から免許皆伝をいわたされ、弟子はようやく一人前になったことが証明された。このような指導法では、言葉ではなくむしろ師との厳しい生活や鍛錬の中で、師の一挙手一投足から自ら学び取らなければならなかった。

このような東洋古来の感性的指導方法に対して、西洋では言葉による論理的な指導方法が古くから普及していた。

したがって、東洋の伝統的指導方法は西洋人にはなかなか理解できないものがあつた。たとえば、ドイツのハイデンプルグ大学から禅の研究にきたオイゲル・ヘルゲリ博士著者「弓と禅」の中でその様子を詳述している。禅の研究にきたヘルゲリは、友人から禅の研究をするのならまず日本の伝統スポーツ、弓道の奥義から始めることを薦められた。そこで弓道の師範について練習を始めるのだが、何年たっても何も教えてくれない。教えを乞うてもいつも要領の得られない返事ばかりが返ってくる。ある時、「矢を放つ心得は何でしょうか」と尋ねると、「放つのを考えるのを止めなさい」という。しつこく尋ねると叱られるので仕方なく考えるのをあきらめて、ただ無我夢中で弓道の練習をしていた。ある時、師大声を張り上げ、「“無我の我”で射てり」と叫ぶ。その瞬間ヘルゲリは弓道の奥義が、「矢を放つときの心境はこだわりを捨てる」ことであることを悟る。

西洋の指導法はまず知識を理解させるために、いかに道筋を立てて論理的に解説するかを求めるのに対し、わが国の伝統的指導は、言わず語らず、肌で感じ、徹底的に鍛錬（学習）

することによって自ら悟ることを求める。しかし、このわが国の伝統的指導法は戦後大幅に改善され、今日では、西洋式の論理的教授法が尊ばれるようになってきた。特に現代の若者は小学校時代から実践を通して悟る教育よりも、言葉を通して順序正しく学ぶ教育を受けてきた。それだけに、最近教師なり指導者には、言葉によって道筋を立て相手に判り易く説明する技術と能力が求められるようになってきた。

かつてピッツバーグのリンカーンの演説に聴衆は酔い、ドイツのヒットラーの演説に聴衆は躍った。スポーツでも敗戦濃厚な戦局の中でもコーチの一言がチームワークを乱し敗れもする。スポーツだけでなく子供の頃の教師の一言によって、人生が変わったことを述懐する人も少なくない。このようにみると、指導者の言葉は選手を生かしもするし殺しもする。それだけ言葉には重みがあり、不用意にしゃべってはいけない。著名な指導者に共通していえることは、言葉の使い方やタイミングが的確であり、言葉によって相手の心のつぼを巧みに刺激する術を心得ている。いつ、どんな時に何を言えば選手達の萎えた心を鼓舞するか、希望と勇気を与えやる気にさせるか、あるいはやる気を維持させることができるかを熟知している。たとえば、小出前積水化学監督はマラソンの高橋尚子選手に「君ならできる」を、本人には勿論マスコミ関係者を前にして連発し、高橋選手に目標と希望を与え、その気にさせて世界記録を樹立させている。

現代は選手に指導者の姿勢や態度から学び取ることを期待するのは木に魚を求めるごとく困難である。そんな教育を受けていない。そのためには指導者自身の人間性、哲学や倫理観、指導理念や方法等の専門的知識、幅広い教養やタイムリーな話題、豊かな語彙等々を基礎とした言語表現能力がより重要となる。

今日のスポーツ指導者には言語表現能力は勿論のこと、それらに深みと広さを与えるための基礎知識が求められている。